

JAUW 調査・研究委員会報告

ケアしあう希望ある社会を目指して

～ユースの生きづらさを探る～



2025年 3月

一般社団法人 大学女性協会

ケアしあう希望ある社会を目指して
～ユースの生きづらさを探る～
目次

ごあいさつ	2
はじめに	3
第1章 アンケート調査	
1 プロフィール	4
2 自分自身のこと	4
3 コロナ禍で受けた影響	6
4 社会活動参加とSDGsの関連	8
5 項目間の相関関係について	10
第2章 インタビュー調査	
1 インタビューに応えた思い	15
2 大学生活の状況	15
3 社会活動について	18
4 大学生活の問題点	19
5 行政・企業・大学などに求めること	20
6 大学女性協会に求めること	22
7 その他	22
8 インタビュアーの感想	23
9 ユースとの報告会について	24
第3章 まとめと考察	
1 本調査の特徴	26
2 コロナ禍がユースに与えた影響とは	26
3 コロナ禍で見えてきた社会課題とは	27
4 ユースとの関りの重要性	28
5 JAUW*としての対応 ー提言ー	29
資料1 アンケート インタビュー設問内容	30

*JAUW：大学女性協会（Japanese Association of University Women）

ごあいさつ

(一社) 大学女性協会は 1946 年に設立された 78 年の歴史を持つ団体です。目標は、女子の高等教育の推進、女性の地位の向上、世界平和の希求です。設立時に比べ、女子の高等教育への進学は著しく伸びましたが、女性の地位の向上はまだまだです。世界平和に関しては、ロシアとウクライナの戦争、パレスチナ・ガザ地区でのイスラエルとイスラム・ハマスの紛争など、平和と程遠い世界情勢です。このような戦争や紛争は、第 2 次大戦終了後の世界秩序を根底から振り動かしており、不安が募ります。

また、2020 年 1 月に発生した新型コロナウイルスによる感染症は瞬く間に日本中、そして世界中に広がりました。新型コロナによるパンデミックは行動の制限など社会活動に大きな影響を与えました。

しかしながら、このような中でも大学女性協会の奨学金事業、調査・研究活動などは一部の制限はありましたが、続けられました。2018 年度から 2023 年度までの 6 年間は、「教育・ジェンダー・共生」をテーマに、シンポジウムやセミナーを開催いたしました。2022 年の公開シンポジウムのタイトルは「ユースの視点から見直そう これからの日本」でしたが、議論の中で「ユースの生きづらさ」という言葉がしばしば聞かれました。

2022 年のシンポジウムを受け、調査・研究委員会では特にコロナ禍でのユースの生きづらさを探るために、アンケート調査とインタビュー調査を行い、お届けする冊子にまとめました。冊子のタイトルは「ケアしあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る～」です。

インフォーマントは大学生、大学院生が中心で、アンケート回答者は 291 名、うち女性が 80% 余りです。大学女性協会の 22 の支部のうち、10 支部が協力いたしました。アンケート回答者の中から 12 名にインタビュー調査を行いました。結果として、新型コロナによるパンデミックはネガティブな面としては、“アルバイトが激減した”などの理由による経済的な面、“対面で人に会えない”などの人間関係の面が挙げられました。一方で、“オンラインや SNS などによるコミュニケーションをより利用するようになった”という点が挙げられました。本冊子では、問題に対する対策や提言も扱っております。詳しくは本冊子を御覧頂き、若い方たちの問題を理解し、次世代につなぐ参考にしていただければ幸いです。

戦争も終結し、次世代のユースが希望を持てる、お互いに助け合える良い社会となることを願いつつ。

2025 年 3 月

一般社団法人 大学女性協会
会長 長谷川瑞穂

はじめに

調査・研究委員会 委員長 片岡雅子

コロナ禍は、3年を超えて私たちの生活全般に大きな影響をもたらしました。紛争、気候変動、経済危機など世界規模の不安が覆う時代にパンデミックが加わり、多くの人が生きづらさを感じている中で、今を生きるユース*1当事者の視点を積極的に学び、誰もが生きやすい希望ある社会を実現していくことが、私たちの責務であると考えました。2022年4月当時、企画委員会が課題として取り上げていた「ユースの視点から見直そう これからの日本」の趣旨に添う形で、先の見えない不安の中ではありますが、今だからこそ取り組むべきテーマとして、「ケア*2しあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る～」の調査研究をスタートしました。

【調査の目的】

- 現在のユースが抱えるさまざまな問題を把握する ○問題の背景にある社会的障壁を認識する
- 社会的障壁の除去や解決方法を検討する ○いかに助け合えるかを追究し、提言に繋げる

【調査方法】

○アンケート調査

全支部への調査協力の呼びかけを行い、10支部の協力を得ました。各支部を通じて大学、学校関係者に依頼、あるいは、学生に直接依頼してアンケートをオンライン「Google form」で実施しました。実施時期は2023年5月～7月中旬、回答へのご協力者は291名でした。

○インタビュー調査

個別インタビューは、アンケート協力者からインタビュー*3を募り、対面あるいはオンラインで実施しました。実施時期は2023年7月下旬～9月、インタビューは12名でした。

○ユースとの報告会

報告会のメンバーは、インタビュー3名と大学女性協会会員12名で、2024年2月27日に本調査の報告と意見交換をオンラインで実施しました。

【*用語について】

*1「ユース」とは、若い次世代という広い意味で、今回の調査研究は、高等教育機関（大学・大学院・短期大学・専門学校）に在籍する学生が対象です。

*2「ケア」とは「支援する者・される者」という関係ではなく、お互いの力のバランスが保たれた思いやりのある助け合いとして、また、行政の福祉政策なども含めた広く包括的な概念としてとらえています。

*3「インタビュー」とは、インタビューを受ける人。

第1章 アンケート調査

「はじめに」で説明したように、2023年に10支部の協力のもと、アンケートを実施し、291名の回答を得ました。以下、概要を述べます。

1 プロフィール

○ 年齢 (2023年4月2日現在)

年齢	18未満	18	19	20	21	22	23	24	25以上
人数	1	73	52	48	52	22	9	7	27

数の多い層を見ると、10代(18歳・19歳)が125名(43%)で、20歳~21歳が100名(34%)でした。

○ 性別 女性 239名 男性 52名

今回のアンケートは、女性の回答者が8割を超えていることが一つの特徴です。

○ 学校種別

	専門学校	短期大学	大学	大学院	浪人
人数	27	13	233	17	1

4年制大学に通学している学生は233名(80%)、短期大学と専門学校に通学している学生は40名(13%)、大学院生は17名(5%)でした。

○ 学年別

学年種別	1, 2年	3, 4年	その他
	(専門学校・短大・大学)	(大学など)	(大学院など)
人数	149	118	24
%	49%	40%	8%

大学、短期大学、専門学校の1,2年生(149名)はコロナ禍の影響を高校生の時に受けた可能性が高く、大学3年生以上や大学院生等(142名)は、おもに大学等入学後にコロナの影響を受けています。回答者の学年から見ると、高校の時にコロナ禍の影響を受けた場合と、大学等入学後にコロナ禍の影響を受けた人の割合はほぼ拮抗していました。

○ 地域

現在住んでいる地域(都府県別)を聞きました。回答者の多い順に、長崎県(58名)、岡山県(48名)、静岡県(37名)で、宮城県(29名)、京都府(21名)、東京都(15名)、奈良県(15名)、新潟県(14名)、滋賀県(11名)、大阪府(11名)、兵庫県(10名)、埼玉県(7名)、神奈川県(6名)、香川県(5名)、群馬県(1名)、千葉県(1名)、長野県(1名)、山梨県(1名)となりました。

回答者の住んでいる地域に偏りがあるのは、大学女性協会の支部のある地域に回答者が多かったり、会員による依頼先の地域が偏ったりしていたことが関係していると思われます。

○ 暮らしの形態

	一人暮らし	寮やシェアハウス	家族や親族と同居
人数	74	15	202

家族や親族と同居している学生が断然多く、202名(69%)でした。地元の大学・短大・専門学校に進学し、自宅から通学している人が多いと考えられます。親元を離れている場合は、一人暮らしが74名(25%)で、寮やシェアハウスなど共同生活をしている学生は15名(5%)でした。

2 自分自身のこと

設問1 ご自身のことを教えてください。

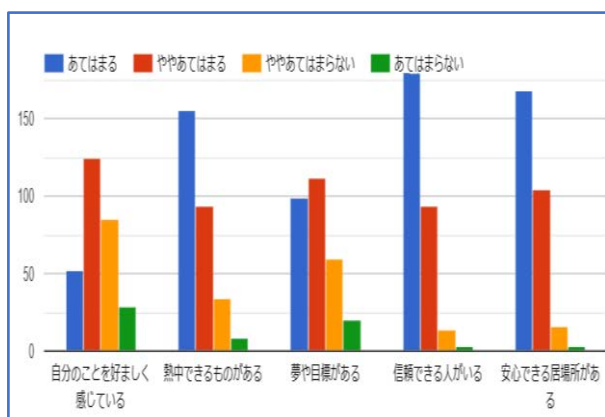
以下の5点について質問しました。

- a) 自分のことを好ましく感じている
- b) 熱中できるものがある
- c) 夢や目標がある
- d) 信頼できる人がいる
- e) 安心できる居場所がある

回答は、それぞれ、次の4つの選択肢から選ん

でもらいました。「あてはまる・ややあてはまる・
ややあてはまらない・あてはまらない」

次のグラフは、その結果を示しています。



a) 「自分のことを好ましく感じているか」という問いについては、以下の回答がありました（数字は人数 問b～eについても同様）。

あてはまる	52
ややあてはまる	125
ややあてはまらない	85
あてはまらない	29

「あてはまる（そう思う）」と明言した答は18%でしたが、「ややあてはまる（ややそう思う）」という答（42%）と合わせると、自分を肯定する人は全体の60%でした。

日本の若者は自己肯定感が低いと言われており、子ども家庭庁発行「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」によれば、「自分自身に満足しているか」という問いに、「はい」と回答した若者は、16.9%であり、「どちらかといえばそうだ」という回答は、40.5%でした。この調査と、今回のアンケートの回答者の自己肯定感は、同じ傾向を示していると言えます。

b) 「熱中できるものがあるか」

あてはまる	155
-------	-----

ややあてはまる	94
ややあてはまらない	34
あてはまらない	8

「あてはまる（そう思う）」と明言した人は53%で、「ややあてはまる（ややそう思う）」という回答と合わせると85%の回答者が「熱中できるもの」を有していました。

c) 「夢や目標があるか」

あてはまる	99
ややあてはまる	112
ややあてはまらない	60
あてはまらない	20

「はい」と回答した人は99名で、「やや当てはまる」（112名）と合わせると、73%でした。

d) 「信頼できる人がいるか」

あてはまる	180
ややあてはまる	94
ややあてはまらない	14
あてはまらない	3

「はい」という回答が180名で62%、「やや当てはまる」（94名）と合わせると、回答者の94%に信頼できる人が存在していることがわかりました。

e) 「安心できる居場所があるか」

あてはまる	168
ややあてはまる	104
ややあてはまらない	16
あてはまらない	3

68名が「はい」と回答し、「やや当てはまる」を選んだ人104名と合わせると、93%となりました。

以上、5つの問いに対する回答をまとめてみると、自己肯定感をもつ人は60%でしたが、「夢や目標」については、73%が有していると回答しました。「熱中できるもの」、「信頼できる人」や、「安心できる居場所」については、それぞれ85%、94%、93%という高い肯定的な回答が得られました。

しかし、熱中できるものや、信頼できる人、安心できる場所が9割前後の高い数値で肯定されていたのに比し、「夢や目標」については、7割強の肯定だったことは、注目されます。

3 コロナ禍で受けた影響と対応

設問2および設問3では、コロナ禍における生活への影響や、悩み事の解決方法について尋ねました。選択肢の中から、自分にあてはまると思う回答をいくつでもよいので自由に選んでもらいました。

設問2 コロナ禍でどんな影響を受けましたか。

アンケートでは、【資料1】(30ページ)に見るように、ポジティブな問いとネガティブな問いをランダムに並べています。まとめにあたっては、回答の選択肢をポジティブとネガティブに分け、ポジティブな選択肢には星印(★)をつけてネガティブと区別しました。それぞれ、回答者の多い順に並べたものが右上の表です。

コロナ禍で受けた影響については、ネガティブな面での影響が多かったのですが、同時にポジティブな面での影響を指摘した回答も多くありました。

ネガティブな影響でもっとも多かったものは、「想像していた学校生活が送れなかった」という回答で197名(68%)でした。「様々な制限を受けストレスがたまった」という回答は123名

選択肢 (★ポジティブ)	人数
★人とのつながりの大切さに気づいた	124
★好きなことに集中し、やりたいことを自由にできた	93
★オンライン授業は学習しやすかった	84
★人生を深く考えるなど様々な学びがあった	81
★教育を受ける方法についての選択肢が増えた	71
★オンラインで人とつながる機会がたくさんあった	66
★自治体や政府の制度で様々なサポートを受けることができた	21
★健康状態がよくなった	18
★大学から様々なサポートを受けることができた	11
想像していた学校生活が送れなかった	197
様々な制限を受けストレスがたまった	123
教育を受ける機会の制約を受けた	97
将来への不安(進学・就職)を感じた	91
漠然とした不安を感じた	88
対面授業がもっと多い方がよいと思った	70
コロナ対策に関する政府・自治体への不信感を持った	62
孤独を感じた	54
健康状態が悪くなった	49
インターネット環境が悪くて学習しづらかった	30
アルバイトができないなど経済的に厳しくなった	22
その他	5

(42%)が選び、「教育を受ける機会の制約を受けた」という回答を97名(33%)が、「将来への不安(進学・就職)を感じた」については91名(31%)が選んでいます。他に、勉学面での影響としては「対面授業がもっと多い方がよいと思った」と考える学生は70名(24%)で、「インターネット環境が悪くて学習しづらかった」という回答も30名(10%)でした。

そのような中でもポジティブ(★)な内容として、124名(43%)が「コロナ禍で人とのつながりの大切さに気づいた」と回答しました。さらに、「好きなことに熱中できた」「人生について考えることができた」という回答も多く、逆境を乗り越える姿勢が見受けられました。

設問3 コロナ禍で受けた影響により、悩んでいることや困りごとをどのように解決、改善しましたか。

選択肢	人数
家族や親族に相談	170
友人や先輩後輩など身近な人に相談	154
誰にも相談せず、自分で何とかした	83
カウンセラーなど専門家に相談	12
面識のない知らない個人(ネット上等)に相談	7
行政や公的機関に相談	3
その他(なし、時間が解決など)	11

(複数回答あり)

「家族や親戚に相談」した学生は170名(58%)、「友人や先輩後輩などに相談」した学生は154名(52%)でした。このように、家族・親族だけでなく、友人・先輩・後輩にも相談した人がいました。その一方で、「誰にも相談せず、自分で何とかした」という学生が28%いました。「カウンセラーなどの専門家に相談」した学生は4%、「行政や公的機関に相談」した人は、わずか1%でした。大学には通常カウンセリング室が設置されていますが、コロナ禍においては、カウンセリング室に行くことすらできなかつたのかもしれない。

次に回答から見えてきたおもな課題をあげてみました。設問4と設問5はどちらも自由記述で回答してもらいました。キーワードの文字の大きさを回答の多少を表しています。

設問4 設問2で選んだ様々な悩みや困りごとを改善、解決しようとするにあたり、障壁(妨げ)となったものは何ですか。

人の目		
モチベーション低下	経済的不安	お金
コロナによる行動制限		政策への不信
ネット環境	相談 誰に? 難しい	
人間関係	怖い 伝わらない	

コロナ禍の2020年4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県で史上

初の緊急事態宣言が発令され、学校の授業もオンラインで行うよう要請されるなど人々の生活が大きく変わりました。そのために、悩み、困りごとの解決にも大きな支障が出ました。回答者の多くが、「コロナによる行動制限」が生じ、「モチベーション低下」や「経済的不安」が起きたことを指摘しています。学校の授業が対面でなくオンラインで行われたために「ネット環境」の不備が、悩みや困りごとの解決を阻んだという声もありました。

設問3の「悩みをどのように解決しましたか」と、その具体策を尋ねた問いに対して、「誰にも相談せず、自分で何とかした」という回答が3番目に多かったのですが、この設問4の回答で、相談しなかった理由が推測される回答がありました。回答者の中には、「人間関係が難しく、誰に相談したらよいかかわからない」、「相談することが怖い、自分の思いが伝わらないのでは」、という切実な思いを述べた学生が複数いました。

設問5 設問4の問題解決のために行なった行動を具体的に教えて下さい。

勉強	図書館・本屋	アルバイト
相談	親 カウンセラー	
コロナ対策	オンライン	会話 音楽 SNS
運動	散歩	睡眠
早寝早起き	食事	気にしないようにする
		諦める 無視 客観視
		考えすぎない

3年を超えるコロナ禍、思い通りにならない困難な状況の中、意識や行動を積極的なものに変えた次のような回答がありました。

- ・家族と今後の事を深く時間をかけて話をし、将来の方向性が決まった。
- ・誰かに相談することで状況の捉え方を変えたり考え方を変えることはできたと思う。

- ・人と話す機会の多いバイトに変えたり、極力外に出て友達との時間を大切にしました。
- ・ネットで調べたり友達の相談に乗ることで、自身の中で自分の悩み事の解決にもつながった。

回答からオンラインや SNS をコミュニケーションや情報を得るためのツールとして活用していることがわかりました。一方で、解決のための行動を「しなかった」「とくになし」という回答が 24 名 (8%) ありました。また、無回答も 165 名 (57%) ありました。

4 社会活動参加と SDGs との関連

(1) 社会的活動への参加状況

設問 6 学内や学外で、ボランティアやイベントなど、社会活動に参加していますか。

設問 6 に対して、「参加している」と回答したのは 87 名、「参加していない」と回答したのは 204 名であり、何らかの活動に参加している人の割合は 30%でした。

設問 7 参加している方にお聞きします。参加している活動は、SDGs の 17 の目標のどの項目に関係しているのかチェックして下さい。当てはまるものがなければ、その他にお書き下さい。



SDGs の 17 の目標

設問 7 に対して、参加者の回答（複数項目選択可/回答者数の多い順）は、以下のとおりです。

- G3. すべての人に健康と福祉を 22 名
- G4. 質の高い教育をみんなに 22 名
- G11. 住み続けられるまちづくりを 22 名
- G17. パートナーシップで目標を達成しよう（いろいろな人や団体との連携） 14 名
- G16. 平和と公正をすべての人に 10 名
- G2. 飢餓をゼロに 9 名
- G10. 人や国の不平等をなくそう 9 名
- G12. つくる責任、つかう責任（生産と消費の責任） 9 名
- G1. 貧困をなくそう 8 名
- G15. 陸の豊かさを守ろう 8 名
- G14. 海の豊かさを守ろう 7 名
- G5. ジェンダー平等を実現しよう 6 名
- G7. エネルギーをみんなに 4 名
- G13. 気候変動に具体的な対策を 4 名
- G8. 働きがいも経済成長も 2 名
- G6. 安全な水とトイレを世界中に（水・衛生問題） 1 名
- G9. 産業と技術革新の基盤を作ろう 1 名

17 の目標を、活動内容別に、次のように分けてみました。社会の安定 (G11・G17・G2・G8・G6) に関する活動に参加している人は、48 名と 1 番多かったです。次に、環境関係 (G6・G7・G12・G13・G14・G15) の活動に参加している人が、33 人と多く、続いて、健康・福祉関係 (G3) に参加している人が 22 名、教育関係 (G4) が 22 名。公平な社会 (G16・G1) が 17 名、平等 (G10・G5) が 15 名と続いています。

政治の動向や昨今の社会問題などによる不確実性を反映している社会に対する取組みへの参加が一番多く、社会の安定を望んでいる人が多いことが解ります。しかし、若者の選挙への参加率が著しく低い現状を考えると、彼らの問題意識は議員や議会政治などへの期待としては全く表われていないことが明白です。学校教育にお

ける主権者教育については、文科省の報告によれば、最新の調査（令和4年）で高等学校では90%以上の学校が実施している、ということから、教育の効果が若者の実生活に活かされていないこととなります。その理由として、教育の方法に工夫が必要である可能性と、現実社会に学んだことが通用しない障壁があると若者は感じていることが推測されます。

次に多かったのは、環境関係の活動への参加でした。17の目標の中で、多くの目標が環境に関わっていることや、身近な問題として取り組みやすかったことが考えられます。教育・健康・福祉に関連した目標に関係した活動も、具体的に取り組みやすいものが多かったのかもしれませんが。

一方、ジェンダー平等など平等に関しての活動への参加は15名でした。国が男女共同参画の形成に関する基本理念を定め、国や地方公共団体、国民の責務を明らかにした「男女共同参画社会基本法」が制定されたのは、1999年。25年が経過した現在、高等教育機関内においては男女平等が比較的確保されており、日常であまり性差を自分事として感じていない可能性と、「ジェンダー」や「女性学」「男性学」などの科目がカリキュラム化されている高等教育機関がすべてではないことも影響していると思われます。

(2) 具体的な活動内容

具体的な活動内容としては、子どもを対象にした活動、教育に関連した活動、地域に根差した活動が多く見られました。次の7種類に分類・整理しました。

- ・金銭に関連した活動：奨学金事業サポート、募金
- ・貧困に関連した活動：たべものカフェ、子ども

食堂、食料配布

- ・環境に関連した活動：もっぺん陶器（陶磁器製食器の無償提供会）、川の清掃、食品ロス減少、古着回収、植樹、ごみ拾い、スポGOMI、間伐材利用モノづくり、草刈り
- ・子ども活動・教育支援：学習支援、野外活動、こどもとの交流、絵本の読み聞かせ、小学校ボランティア、小学生薬剤師体験、塾講師、赤ちゃんとのふれあい、木育、子どもに異文化交流、児童養護施設での学習支援、理系分野の普及活動、小中学生キャンプ裏方、わんぱく寺子屋
- ・調査・啓発活動：貧困現状調査、仕組みを変える活動、平和と公平啓発活動、買春防止を考えるサークル、環境問題啓発、保護犬殺処分撲滅
- ・精神的サポート：話をする、オンライン哲学対話、キャンプカウンセラー
- ・地域活動：地域の子育て支援フェスタ、地域リーダー育成、高齢者へのスマホ指南、新聞を読んで意見交換、ピースボランティア、語り部、子ども・障がい者との交流、少年自然の家でのボランティア、幅広い年齢層と交流

上記の活動内容をさらに具体的にみると、以下のような記述がありました。

基本どの項目にもあてはまる研究会、子どもたちの居場所となるような環境を作る、子ども達に学校外で行える楽しく様々な経験を共に行う（諫早市立少年自然の家にてボランティア活動のスタッフとして）、遊びと学びの両立（寺子屋という大学のボランティア団体に属し、毎月、子供達に学びと遊びを両立した企画を行っている）、赤十字：献血や募金、子どもたちやその保護者と関わるイベント（子どもたちの目の前で劇や歌を歌ったりする）、官民協働留学支援制度の同窓組織で、派遣留学生同士の交流や留学促

進の活動、等が挙げられていました。

一方、活動に参加しないことの理由としては、「形だけのSDGsを標榜するような行為はしない、社会教育を中心に学校教育も交えて活動に参画している。」との意見がありました。

(3) 他項目との相関関係について

次節での項目間の関係についての考察から、二つのことが示唆されました。一つは、社会活動への参加は、20歳以下では27%、21歳以上では34%と、コロナ禍を高校生として過ごした年齢層の若者の方が少ない傾向がある。もう一つは、困りごとの解決方法として「自分で何とかした人」59人のうち、社会活動に参加しているのは16人に対して参加していない人は43人と3倍弱で、不参加の傾向がより顕著でした。

5 項目間の相関関係について

アンケート結果の考察をするにあたり、いくつかの項目間の相関関係を検討しました。

(1) 設問1（自分自身のとらえ方）について

4ページで述べたように、自分自身のとらえ方について、以下の5項目の設問を設けました。

- a) 自身のことを好ましく感じている
- b) 熱中できるものがある
- c) 夢や目標がある
- d) 信頼できる人がいる
- e) 安心できる居場所がある

それぞれ、「あてはまる・ややあてはまる・ややあてはまらない・あてはまらない」の4段階の回答の中で、最初の2つを肯定的回答、後の2つを否定的回答とし、回答者数を表1にまとめました。

表1 自分自身についてのとらえ方

	a)	b)	c)	d)	e)
肯定的回答	177	249	211	274	272
否定的回答	114	42	80	17	19

否定的な回答がいちばん多かったのは a) 「自身のことを好ましく感じている」の114名(39%)でした。しかし、a)で自分を好ましく感じていないと回答した人の中でも、信頼できる人がいる人は103名(90%)、安心できる居場所がある人は100名(88%)あり、信頼できる人がいることや安心できる居場所があることと、自分自身を否定的にとらえることとはあまり関係がないことがわかりました。

次に否定的な回答が多かったのは c) 「夢や目標がある」の80名(27%)でした。その中でも、熱中できるものがあると回答した人は59名(74%)、信頼できる人がいる人は69名(86%)、安心できる場所がある人は66名(83%)を占めていました。この設問についても、夢や目標がないと回答した人でも80%以上の人は信頼できる人がいる、安心できる居場所があると回答しています。信頼できる人がいない、安心できる居場所がないという学生は、今回のアンケートに回答を寄せる余裕もなかったと言えるかもしれません。

最初に示したように、回答者の内、男性は18%と少なかったため、男女別のデータを表で示していませんが、男女間で10%以上の差があった項目はc)の「夢や希望がある」という項目だけで、「あてはまる」は、女性36%・男性23%であり、女性の方が、やや明確に夢や目標があるという結果になりました。しかし、「ややあてはまる」は、女性36%・男性50%であり、「あてはまる・ややあてはまる」の両者を合わせた肯定的回答は男女差がほとんどありませんでした。

(2) 設問2 (コロナ禍で受けた影響) について

設問2への回答の集計は6ページの表に示しています。自分にあてはまる選択肢をいくつでも選んでよいという形式の設問でした。選択肢作成時には、ポジティブな選択肢(9項目)とネガティブな選択肢(11項目)を設定しました。

アンケート回答者には、その設問がポジティブかネガティブな内容かは示さず、【資料1】(30ページ)に示すように、配列もランダムにしました。選択肢に「その他」も設定し、自由記述としました。

「その他」を選択した回答者は5名で、その記述内容は「コロナ禍で色々な情報が飛び交うおかげで情報リテラシーが身に付いた」「対面授業の必要性を問い直すタイミングとなり、不必要な授業がいかにか多いか理解できる機会となった」「コロナ以前から経済的な不安はありました。コロナのせいで変化したのではなく、元々あった問題が顕在化しただけだと思っています」「特に何もなかった(2名)」とあり、ここでも、ポジティブ及びネガティブな回答が見られました。

表2は、アンケート回答者がいくつの選択肢

表2 選んだ選択肢数とその選択者数

選択肢数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16
選択者数	2	24	40	47	27	38	34	23	22	12	9	2	6	3	1	1

表3 ポジティブな項目の選択者の傾向

ポジティブな項目の選択数	0	1	2	3	4	5	6	7
選択者数	62	71	69	39	26	13	10	1
該当者がネガティブな項目を選択した総数	151	199	211	128	114	119	79	7
一人当たりネガティブ項目選択数の平均	2.4	2.8	3.1	3.3	4.4	9.2	7.9	7.0

表4 ネガティブな項目の選択者の傾向

ネガティブな項目の選択数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11
選択者数	23	56	66	42	34	29	18	12	5	5	1
該当者がポジティブな項目を選択した総数	52	82	125	71	61	52	51	32	19	12	5
一人当たりポジティブ項目選択数の平均	2.3	1.5	1.9	1.7	1.8	1.8	2.8	2.7	3.8	2.4	5.0

を選んだかを示しています。回答者のほとんどが複数の選択肢を選んでおり、9項目以上を選んだ回答者が34名(12%)もいました。

表3は、1人の回答者が選んだポジティブな項目の選択数と、その選択者数、それぞれの回答者が選んだネガティブな項目選択数の総数を示しています。一番下の欄は、それぞれの総数を選択者数で割った値で、1人が選んだネガティブな項目選択数の平均を示しています。

ポジティブな項目を5つ選んだ回答者13名は、平均してネガティブな項目を9つも選んでいます。回答者はポジティブ及びネガティブな思いを同時に多く持ったことがわかります。全体的にはネガティブな項目をより多く選んだことが読み取れます。

表4は表3のポジティブとネガティブを入れ替えてまとめた表です。ネガティブな項目の選択数が0か1かを除き、ネガティブな回答を多く選んでいます。

(3) 設問1 (自分自身のとらえ方) と設問2 (コロナ禍で受けた影響) との関係について

設問2で、1人の回答者がポジティブな選択肢

表5 設問2のポジティブな項目の選択数と設問1の肯定的回答選択者の割合

ネガティブな項目の選択数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11
選択者数	23	56	66	42	34	29	18	12	5	5	1
a)自分のことを好ましく感じている	61	66	56	57	44	72	78	58	80	80	0
b)熱中できるものがある	78	75	94	83	76	83	94	83	80	100	100
c)夢や希望がある	65	45	77	69	68	83	78	75	80	60	0
d)信頼できる人がいる	91	61	97	90	94	93	100	100	100	100	0
e)安心できる居場所がある	87	41	97	90	97	93	100	92	100	100	0

表6 設問2のネガティブな項目の選択数と設問1の肯定的回答選択者の割合

ポジティブな項目の選択数	0	1	2	3	4	5	6	7
選択者数	62	71	69	39	26	13	10	1
a)自分のことを好ましく感じている(%)	53	59	68	59	58	69	80	0
b)熱中できるものがある(%)	82	68	78	92	88	92	100	100
c)夢や希望がある(%)	61	63	87	77	73	77	80	100
d)信頼できる人がいる(%)	90	97	91	97	100	92	90	100
e)安心できる居場所がある(%)	92	94	88	100	100	92	90	100

を選んだ数は、9個の選択肢中0～7でした。

一方、1人の回答者がネガティブな選択肢を選んだ数は、11個の選択肢中0～11で、11個すべてを選んだ回答者も1名いました。

表5は、設問2においてポジティブな項目を選択した数と、設問1のa)～e)で肯定的回答をした人の数の関係を示したものです。例えば、ポジティブな項目を1つだけ選択した71名のうち、a)「自分のことを好ましく感じている」人は59% (42名)ということを示しています。

肯定的回答が90%以上は濃橙色、80%～89%は淡橙色、50%～59%は淡青色で示しています。ポジティブな選択肢を7つ選びながら、a)で否定的回答をした者が1名いた以外は、いずれも50%以上が肯定的な回答であり、その多くは80%以上が肯定的回答を選んでいました。ポジティブな選択肢を選ぶ数が少ないと、「自分のことを好ましく感じている」の肯定的回答がやや少ない傾向にありました。

表6は、ネガティブな項目の選択数に注目し、表5と同様の方法でまとめたものです。濃青色

は肯定的回答者が40%代を示しています。

表5と6から、アンケート回答者は、信頼できる人がいる、安心できる居場所がある人でも、様々な困難に出あうと同時に、コロナ禍で得たものがあると感じていることがわかります。

(4) 設問1と設問6(社会活動参加)・年齢(2023年4月2日現在)との関係について

回答者の年齢分布は表7に示しています。

表7 年齢と設問1の肯定的回答の割合・社会活動参加の有無の関係

	(1)で肯定的回答の割合(%)					社会活動参加有(%)
	a)	b)	c)	d)	e)	
20歳以下	55	85	68	93	93	27
21歳以上	70	86	79	96	94	34

回答者の25%が18歳、19歳と21歳が18%、20歳が16%と続きます。18歳から20歳までの多くは、コロナ禍を高校生として過ごしたと考えられますので、20歳以下と21歳以上に分けて、自分自身のとらえ方や社会活動への参加に違いがあるかを考察しました。

設問 1 でいちばん差が大きいのは a)「自分のことを好ましく感じている」であり、20 歳以下で自分のことを好ましく思っている回答者の割合は 55%、21 歳以上では 70%でした。次に差が大きいのは c)「夢や目標がある」で、21 歳以上では夢や目標のある人が 80%近くあり、20 歳でも 70%近くが夢や目標を持っていることがわかりました。社会的活動に参加しているのは、20 歳以下では 27%、21 歳以上では 34%と、21 歳以上の方が多くなっていました。

(5) 設問 1 と住まいの関係について

回答者の住まいについては 4 ページの表に示しています。住まいは、家族や親族と同居 69%、一人暮らし 25%、寮やシェアハウス 5%であり、回答者の 70%近くが家族や親族と同居している人でした。

表 8 住まいと設問 1 の肯定的回答の割合

	(1)で肯定的回答の割合 (%)				
	a)	b)	c)	d)	e)
一人暮らし	66	88	77	96	96
寮やシェアハウス	67	93	80	87	93
家族や親族と同居	58	84	70	94	93

表 8 は、住まいと自分自身のとらえ方との関係を示しています。住まいの形態に関わらず、a)の「自分自身を好ましく思っている」割合は 70%未満でした。肯定的回答の割合が 70%だったのは c)の「夢や希望がある」であり、家族や親族と同居している回答者でした。その他の項目については、生活形態に関わらず、肯定的回答が多くなっていました。

(6) 困りごとの解決方法に注目した分析

困りごとの解決方法として「自分で何とかした人」は 59 名で、女性が 46 名（女性の 19%）、男性が 13 名（男性の 25%）でした。年齢を見ると 20 歳以下が 37 名（20 歳以下の 21%）、21 歳以上が 22 名（21 歳以上の 19%）で、若い学生の割合が少し高くなっていました。

その回答者たちに注目し、設問 6：社会活動への参加の有無との関連を調べると表 9 のような結果でした。

表 9 社会活動への参加の有無と年齢

	女性		男性		合計
	20以下	21以上	20以下	21以上	
参加	10	4	1	1	16
不参加	19	13	7	4	43
小計	29	17	8	5	59
合計	46		13		

「自分で何とかした」と回答した学生のうち、社会活動に参加しているのは 16 名、参加していないのは 43 名で、圧倒的に不参加の学生が多いことがわかります。「悩みや困りごとを改善、解決しようとするにあたり、障壁(妨げ)となったものは何か」という設問 4、「設問 4 の問題解決のために行った行動を具体的に教えてください」という設問 5 の答えを、社会活動に参加している学生と参加していない学生に分けて回答の内容を調べた結果を次ページの表に示しています。社会活動に参加しているか否かで、回答に明確な差は認められませんでした。

悩みや困りごと解決に対する障壁（設問4） ⇒ 解決のための行動（設問5）

【社会活動に参加している人の回答】

女性

- ・お金 ⇒ バイト
- ・コロナで制限があり、しょうがないと思いました ⇒ 特に何もやらなかったです
- ・解決するための情報がなかった、またあるのがわからなかった ⇒ 自分で調べた
- ・学校や政府のコロナへの対応 ⇒ 回答なし
- ・気持ち ⇒ 好きなことをする
- ・自粛期間 ⇒ ストレス発散や進路などいろんな情報を収集するようにした
- ・相談することが怖いという恐れ ⇒ 自分の中でなんとか消化した
- ・誰に相談すれば良いのか分からなかった ⇒ 回答なし

男性

- ・学校の教職員 ⇒ とくになし
- ・日本にはデジタル人材のいないことで多くの不便があったと思います ⇒ 回答なし

【社会活動に参加していない人の回答】

女性

- ・お金や人間関係 ⇒ アルバイトを始める。友達の選別をした
- ・コロナがずっと終息せず、何度も波がきたこと ⇒ 感染症対策
- ・コロナの状況そのもの ⇒ ワクチンの接種、室内での簡単な運動
- ・バイトや課題の忙しさ ⇒ 回答なし
- ・外出自粛、緊急事態宣言 ⇒ ネットで調べたり、友達の相談に乗ることで、自身の中で自分の悩み事の解決にも繋げた
- ・外出制限 ⇒ オンライン
- ・思うように外出できないため、友人と対面で話ができなかったこと ⇒⇒ ラインなどで頻りに様子を聞き合った
- ・人と会うことができない。外に出て気分転換することができない ⇒ 寝る
- ・対人関係 ⇒ 熟考することをやめた
- ・特になし ⇒ 特になし
- ・必要な情報がどこにあるかが分からない ⇒ 回答なし

男性

- ・ない ⇒ 時間をかけた
- ・なし ⇒ それに適した行動を行うのみ
- ・改善しようとするやる気の有無 ⇒ 気持ちを高めた
- ・改善に向けた行動に至るまでの気力がなかった ⇒ 家にいる時間が増えた分生活のサイクルも変わり、なおかつ健康に対する気力があるというわけでもなかったのので、家の中でできる簡単な運動を毎日5~10分だけしてみるなどしてみた。今はコロナの制約も緩和されているのでしていない
- ・自分の周りの人達の日 ⇒ 周りに合わせるような行動
- ・生活習慣の乱れによる昼夜逆転 ⇒ 解決していない

第2章 インタビュー調査

アンケートに加え、さらに詳しくお話しを聞くため、アンケート協力者からインタビューを募り、応募者12名に対面またはオンラインでインタビューを実施しました。

2023年7月～9月実施

<回答者の学年>

大学1年2名、大学3年2名、大学4年3名内1名は在学5年(註1)、大学院1年2名、大学院2年1名(註2)、大学院後期課程3年1名、専門学校1年1名(註3)

(註1)入学時、志望学科の実験実習がコロナ禍のため受講できず、やむを得ず転科し、単位不足から5年在学

(註2)留学生。母国の大学で日本語を専攻し、卒業後に来日して企業勤務後、MBA取得のため大学院に2022年に入学

(註3)正社員であったが、コロナ禍時期に先が見えない現状に不安を覚えて正社員を辞め専門学校に入学

<回答時の在住地域(担当支部)>

新潟、東京、静岡、京都、奈良、岡山、長崎

1 インタビューに応えた思い

- ・アンケートだけでは自分の思いを伝えきれなかった
- ・ユースの声を聞いてもらえる機会だった
- ・学生の現状や抱えている問題を共有してもらえると思った
- ・本調査に協力したいと思った
- ・「若者が生きづらさを抱えている社会」を実感している

- ・普段インタビューをする側なので、インタビューを受ける側の経験をしてみたかった
- ・一旦社会にでてから学生に戻ったので、同じ思いの女性たちの役にたてればと思った

2 大学生生活の状況

<学業>

- ・目標があるので張り合いがあって楽しい
- ・専門的な学びができて興奮する
- ・コロナ禍の授業(録画、ZOOM、レポート提出)は肯定的に受け止め、利便性を感じた
- ・コロナ禍で、実験もオンライン授業となり無力感を感じて、2021年に転科した
- ・2年生になって、週2回くらい対面授業が始まった
- ・外出制限で、旅行や留学に行けなかった
- ・3年生では毎日大学に行け、オンライン授業が徐々になくなった
- ・4年生では授業はほとんど対面で、マスク着用も自由になり、外出制限もなくなり、普通の学校生活に戻った
- ・大学に入ってから、対面授業だけでコロナ禍の影響はない(高校3年間はコロナ禍の影響をずっと受けた。1年生は入学式なしで、オンライン授業のみ、2年生から対面授業になったが、希望者はオンライン授業を選択できた。3年からマスク着用で対面授業になった。卒業式はあった)
- ・学部時代は、規模が小さかったので対面授業が多かった
- ・院生になってからは、他大学の授業も含めて、対面でできている

- ・大学院の授業は、留学生は全て対面、日本人はオンラインか対面を選べる
- ・1年生は9割がオンライン授業だった
- ・3年生になり、毎日が忙しいと感じている対面授業だが、授業によってはオンラインとの差が感じられない
- ・博士課程では授業はなく、今は実験と研究を進めて論文を書いている
- ・今年5月から国立産業技術研究所でリサーチアシスタントとして隔週ペースで勤務している
- ・いろいろなインターンに参加している
- ・8月にドイツの石油化学センターに1週間参加し、ドイツの博士課程と意見交換、交流を図り、研究、博士課程、進路などの日本との違いを聞くことができた
- ・2024年9か月間カナダに留学する
- ・博士課程で授業はない。学位論文の研究の傍ら、いろいろな団体に研究費の応募申請をしているが、なかなか審査に通らず、学位論文の研究が進まない
- ・専門の心理学は様々な手段で実質的に習得でき、卒業論文テーマ「若者の間に生まれ流行している言葉の社会背景の探索」に取り組んでおり、半年先の卒業後には同大の大学院へ進学する予定。将来は、一人一人の心をその社会背景を含め広い視野から深く考察できる心理カウンセラーとして働きたいと思っている
- ・勉強が大変なのは仕方がないとしても、体力的な部分と、学費の工面が一番大変である。現在は正社員時代に貯めた預金を取り崩して生活しているが、ゆくゆくはアルバイトをしなければならない状況なので、学業と両立

できるかどうか心配

<友人関係>

- ・コロナ禍は、オンライン授業だったため友達ができなかったが、バイト先でできた
- ・学外で年上の友人ができた
- ・コロナ禍は、ライン電話、会話型心理ゲーム、オンライン食事会・飲み会をよくやった
- ・入学時からオンライン授業の学生は積極的で、一度できた友達をとっても大切にしている
- ・大学はクラスがないので特定の人と毎日会う環境がなく、友達ができないことが一番残念だった
- ・3年から毎日大学に行けるようになり、サークル活動から友達が広がっていった
- ・知的障害のある軽犯罪を犯した人と共に原付バイク免許取得の勉強などをしていた
- ・サークルで唯一同郷の友人と会って話ってきたことが救いだった

<部活・サークル活動>

- ・入っていない
- ・入っている人は、活動ができていた
- ・入学式もなく、全部オンライン授業だったので、大学生らしいことをしたくて、若者の余暇活動を支援するサークルに入った。1年生の5月くらいからサークル活動を始め、一つの団体に入ると先輩や他の大学生と話ができて大学生活に馴染んでいった。2年生の前期までオンラインでの活動だった
- ・学部生時代には、ビッグブラザーズ&シスターズ(BBS:特定非営利活動法人日本BBS連盟)で活動していた
- ・コロナ禍ではじめたサークル活動:先生と共に、英語のアクティビティや映画上映などをおこなった

- ・コロナ禍中、児童養護施設で英語のアクティビティを行ったが、継続できなかつた（関係作りがうまくできなかつた）
- ・大学院での研究テーマは、養護施設に関することである（養護施設で働きながら関わることが有利である）
- ・社会的養護の経験あり
- ・1年生は部活禁止という環境の中で、下宿一人暮らしの寂しさからサークル活動に参加
- ・学外活動として、卒業した大学の先生と院生とで研究会をしている
- ・コロナ禍で予期しなかつた問題意識や課題発見につながり、解決のために学内、学外のサークルや活動を開発し始動でき、現在活動の推進に努力しており、やりがいを感じ非常に充実している

<キャンパスライフ>

- ・いわゆる楽しいキャンパスライフを経験できなかった
- ・自宅通学のため、特に不満なし
- ・大学入学式がなく、資料だけ取りに行き、講義は全部オンラインだったので、大学がわからないことだらけだった
- ・1年生の5月くらいからサークル活動を始め、一つの団体に入ると先輩や他の大学生と話ができ、大学生活に馴染んでいった
- ・3年から毎日大学に行けるようになり、友達もできたので、大学に行くのも辛くなかつた
- ・社会人大学のため、授業以外のサークル活動や学校行事が少なく、学生との交流がほとんどなく孤独で寂しい時がある
- ・入学から2年間、コロナ禍で継続的な緊急事態宣言下で大学生活を送ったので、期待したことは全く充たされなかつた

<アルバイト>

- ・自宅近くで過度の負担なく勤務できている（自動車学校費用のためなので、やりがいがある）
- ・3年間、養護施設の管理宿直のバイトをした子どもたちと生活を共にできた
- ・大学院の費用は、貯金とバイトでなんとかやっている
- ・国際ボランティアセンターで週1回事務スタッフ、人材紹介会社での通訳翻訳サポート、飲食店勤務
- ・学内の学習相談をしているが、夏休み中は相談もなく収入が減るので飲食店のバイトをしている
- ・自分の中学校時代の不登校経験の影響もあり、NPOに所属し市内で学生と関わる仕事をしている

<奨学金>

- ・日本学生支援機構の給付型奨学金を受けていた。学費の3/4にあたる。お蔭で貯金により進学できた
- ・民間団体の奨学金の審査に通らず経済的不安が大きい

<やりがいを感じていること>

- ・就活と家庭教師
- ・公務員を目指しており、教員免許も取得予定

<周囲の状況>

- ・コロナ禍に大学生協からお弁当、生活必需品の配布があった
- ・コロナ禍にアパートを引き払って地元に戻った人を知っている
- ・一人暮らしの学生は実家に帰れない、バイトが休みで大変と聞いた
- ・ほとんどの学生がバイトをしているが、自由

に使えるお金が目的の人が多い

<その他>

- ・大学の国際寮で自分と同様の養護施設経験者と関わった際に、虐待する親をはっきり否定するアメリカ人に衝撃を受けた。家族として仲良くすべき、というそれまでの思い込みがあったので、親の都合で子どもに影をおとしていいのか？との考え方が新鮮に思えた
- ・現在就活中

3 社会活動について

<活動中>

- ・高校時代からユネスコスクールに関わる活動をしている
- ・YEC（若者エンパワーメント委員会）という大学の公認サークルに参加している。市内在住の中高生を募集し、大学生2~3人とグループをつくって、その中高生がやりたいことを半年間かけて計画し実施する活動
- ・「学生たすけたいんじゃー」で活動中。食料配布、食べ物カフェ、食事を配る活動でヒアリングも行なっている。キャンパスソーシャルワーカーの設置を大学と県に要望
- ・2023年6月から児童福祉に関するIFCA（インターナショナル・フォスターケア・アライアンス）に当事者ユースとして関わっている。ライフストーリーを伝える方法などを勉強中。自分が傷つき、人を傷つけることもあることを認識し、回避する方法を学んでいる
- ・2023年度子どもアドボカシー学会（アドボカシーの実践と理解と研究）に参加
- ・「国際ボランティアセンター」で、児童や学生の支援を中心に活動。フェイスブックで調べて自分から連絡を取って参加した。楽しく

有意義である。このアンケートに答えたきっかけにもなった。県国際交流協会で1年間ボランティアをしている

- ・大学2年生の終わりに、自ら学内の学生に呼びかけ5名の有志で「ECO JS ECHO」を発足させた。SDGsを基軸に社会を知り考え行動するボランティア団体である。その後メンバーは20名になり、2023年2月、長崎を訪れたEU駐日大使とEU加盟国大使たちと大学生の交流会を行い、英語でこの団体の活動を紹介した。パケEU駐日大使から「長崎の過去と未来から学ぶことができた」との感想をいただき、「未来」を示すことができたのではないかと思っている
- ・大学3年生の終わりに「平和を伝えるWebサイト」ISSOKU（一足）を創設、運営。これはウクライナ戦争が1年継続している中で、学内の学生仲間に呼びかけて、平和を考える機会が多くある長崎の学生が協力して“あったらいいな”と思う団体を創設したものである。この活動は大きな広がりを見せ、日本と世界の学生と多様な社会で活動する人が集まりそれぞれの得意を活かして活動する場となっている。ISSOKUでは共同代表として平和にかかわる若手にインタビューし動画をサイトにアップし、「平和」とは「子どもたちが将来を描ける社会」、「貧困問題、環境問題などにも取り組み実現しなければならない」、「命を脅かされずに全うすることができる環境」などのメッセージを引き出して発信している。一連の活動は市内の大型ビジョンで紹介され、「長崎SDGsクラブ」の長崎SDGsカレッジ「平和？SDGs 私たちが平和のためにできること」で事例紹介を行うなど、活動

継続中

<現在活動していない>

- ・今は様子見している
- ・かつて農業関係のボランティアを経験した
- ・株式会社 TABIPPO の学生支部スタッフとして活動していた
- ・環境問題や不登校の子供向けの教育などに興味があり、何らかの社会活動をしたい
- ・研究、留学のためのデータ集め、就活で多忙
- ・学部生時代、塾講師をして中高生向けに理系の進路アドバイスをしていた
- ・時間的に余裕がないので、していない

4 大学生生活の問題点

<経済的な問題>

- ・奨学金を借りる人（含む自分）が多いことに驚いた
- ・一人暮らしの学生は、授業料以外に生活費が相当かかるので、授業がない時は出来る限りバイトを入れたいが、税制上 103 万円の壁で制限される
- ・美術系大学で学びたい人が働いてお金を貯めてから入学したが、経済的な理由で学び続けられなかった
- ・国民健康保険の保険料負担が重く困っている。前年に給与を得ていたため、退職した現在所得が低くなっても保険料が高い
- ・経済的に厳しい。無理してバイトしている人もいる
- ・実績のある人が研究費をとって、実績を作れない人はバイトをして駆けずり回り、バイトをしない人が更に実績を作る。そんな構造が見えてきて、それが本当に平等なのか？
- ・授業料全額免除の奨学金を受けている

- ・保護者の経済的理由で大学進学をあきらめた学友もいる。卒業論文でも取り上げている「親ガチャ」に表れている「「機会平等」が果たされていない社会基盤により生じていると思われる諸現象”である

<人間関係>

- ・大学生、若者が冷たいと感じる。不愛想、他人に無関心、過度な接触を嫌う傾向を危惧している。希薄な人間関係はネットの弊害かもしれない。家族を大切にしない傾向があり、家庭が教育を先生に任せすぎているとも感じている。みんな愛を欲しいと感じているはずで、それには愛を与えることが必要と感じている
- ・学生生活では問題ない
- ・フードロス、ゴミ問題が社会的に問題と思っているが、学生が地球環境や政治問題に口を出すことに周囲が寛容ではないので「意識高い系」と言われたいよう発言を控えている
- ・1、2年生の時は協力的だが、高学年になると自分中心になりがちで自分の世界が決まってしまう人が多い
- ・大学生活 1 年間はほぼオンラインだったので、今さら人間関係を新しく作るのも面倒になり、全然友達がいまま一人でもいいやおもって過ごしている人が結構多いようである。人と繋がることを面倒だと感じる人が増えたような印象がある。サークル活動で集まろうと呼びかけても集まらない、初対面の人がいるとちょっと敬遠される。仲良くなるために飲み会に誘っても行きたがらない人が増えた印象である。お酒の席には行かない、行きたくない人が増えた
- ・コロナ禍で食事やお茶、飲酒など交流の機会

が持てなかったため、今初めて経験している

- ・交流の場が乏しい
- ・社会人向け大学のため授業以外の活動が少ない。日本人学生はオンライン出席が多いので、日本人学生との交流がほとんどない
- ・大学ではもう少し密な人的交流ができると思っていたが、先生方も学生もマスクを外す人が少なく、他者の理解が全然できないのではないかと不安不満に思うことがある

<進路>

- ・博士課程に進学する学生が減っている。特に女性は就職が遅くなり、結婚、育児をしたいというビジョンが見えにくい
- ・自ら博士課程の学生として奮闘していく中で、最終的には今後博士課程への進学を臨んでいる女子学生に自分の考えを還元したい

<就活>

- ・就職活動中で、日本語でのSPI検査や面接の難しさに直面している

*SPI検査「Synthetic Personality Inventory」の略。リクルートマネジメントソリューション社が開発した適性検査

<生活面>

- ・雪が多い時に困る。公共交通が不便

5 行政・企業・大学などに求めること

<経済的な面>

- ・大学は思った以上に費用がかかるので、本人の意志と能力がある限り、もう少し支援してもらえる社会であってほしい
- ・経費節減のため希望校を断念して地元の国立大学の望まない学部へ進学した友人がいる。改善できる方法はないのか？
- ・給付型の奨学金はありがたい。貸与型の奨学

金は、成績に応じて返済額、方法を柔軟にするなど返し方を工夫して欲しい。

- ・大学内のアルバイトの時給が低い。オープンキャンパスの手伝いの時給が945円で、県の最低賃金944円より1円高かっただけである。金額を見て自分は応募しなかった。大学の時給は低いらしい。理系の人なら、学内のバイトより近くの塾講師の方が時給がよいし、大学受験で数学や理系の需要が高いから、理系の人材は塾で重宝されている

- ・奨学金の充実

- ・奨学金は長期的に大きな額を給付、貸与してもらうイメージがあるので、短期的に奨学の一時給付金のようなシステムがあれば利用しやすいのではないかと？

- ・奨学金制度の見直し。返済の問題も大きい

- ・博士1~3年では、目の前から現金が消えていくのに振り回されて論文が書けなかった。政策を決める人はそういうことをわかっていない。おそらく論文も書けないで博士課程を辞めていった人がいる。博士課程に入る人には皆平等に奨学金を出せばよいと思う。外国では博士課程の学生の研究環境がもっと整っている

- ・博士課程の理系は女性が少ない。学費がかかるからである。海外では大学院で給料がもらえるのに日本ではもらえない

<行政に対して>

- ・学生がもっと政治や環境に関心を持てるようにしてほしい
- ・「あべのマスク」配布時に、政府が本気で感染対策をしているのか疑問に思った
- ・国民健康保険料について、留学生を支援する制度をつくってほしい

- ・日本の政治は特に教育面での変革が遅い。大切な政策を決める政治に文系理系のドクターを取った人や女性が入っている方が、視点が偏ることなく学術研究費に理解が進み政策が動く
- ・教育費の充実
- ・論文も出せないでドロップアウトしてしまう人があることを国は考えているのか？
- ・親ガチャ状態から生じる理不尽な差別・格差を前提とした社会を少しでも変えて、「どの子どもも将来を描ける社会＝平和」が実現できるように、現行のシステムや慣習を見直す働きを実行してほしい
- ・活力ある社会を作りたいのであれば、若者が選挙で変えられる社会であることを示せるような選挙制度や、普段の社会運営に若者の意見を取り込む制度を設けて運用し、希望が持てる社会であることを示してほしい
- ・学費という金銭面での問題が大きい。高い学費を払っても将来が保証されない不安がある限り、博士課程の学生は増えない。政治の問題である

<企業に対して>

- ・就活では中小企業は柔軟、大企業はふるい落とす対応と感じている
- ・就職採用試験は、日本語の質問が直接的ではなく遠まわしで理解が難しい。日本人の感性の影響もあるのだろう。面接はどこの企業でも同じ質問が多い。多くの企業がSPI 検査を用いる。求職者の個性がわからないのではないか？
- ・本当に優秀な学生をリクルートしたいのであれば、困窮学生に対する奨学事業に力を入れるなど新規に展開してほしい

<大学に対して>

- ・大学によって起業セミナーを実施している私立校と公立校の格差が大きいと感じる。就活では、私立大は丁寧に指導してくれるが、国立大は無関心
- ・学内のアルバイト賃金をあげて、理系の人も働きやすくしてほしい
- ・就職面接のトレーニングは外国人学生向けのメニューも行ってほしい。日本語や日本文化や日本人の感性を知るために、日本人学生と親しく交流できる機会がほしい
- ・最初から文系、理系の枠組みを決めない方がよい。文系理系関係なく学び、誰でも入りたい大学に入って、卒業を難しくした方がよい
- ・現在学内に、発達障害の相談室、医務室、カウンセラーなどの様々な相談室があるが、既存の医務室などでは、今お金がなくて困っている、生活が成り立たない、という話をしてもらっても取り扱ってもらえないところがない。生活面の支えを相談できるようにキャンパスソーシャルワーカーを置いて、いろいろな相談室の連絡を総括する纏め役をやってもらうことを要望

<先生について>

- ・大学の先生方は、学生の政治や環境についての活動に興味関心がないようにみえる
- ・大学において、話を聞くことがパフォーマンスにしか感じないことがあった。男性の先生が、学生の名前を呼ぶ際に、「さん」と「君」を分けることに必死になっていたことに違和感があって目安箱に意見を入れたが、何のフィードバックもなかった

<大人に対して>

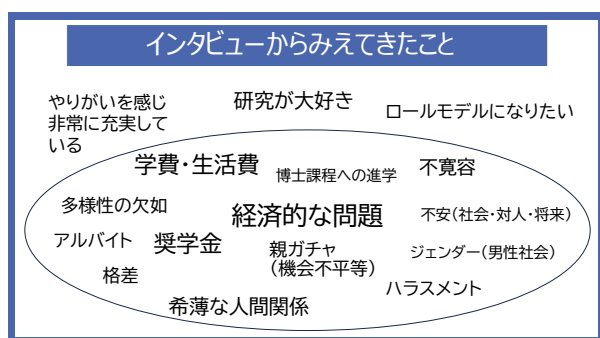
- ・大人との対話（双方向のコミュニケーション）

がしたい。意見や問のフィードバックが欲しい。意志決定まで寄り添ってほしい

<その他>

- ・現在の学生の主流は、Instagram, TikTok, BeReal である

以上、第2章 1~5 に提示したインタビューの回答、実際にユースが発した言葉を出現頻度に応じて大きさを示したのが次の図です。(大まかな傾向を可視化する目的で作成した図であり、AI などを使って正確に行なったものではありません。参考資料として下さい。)



さまざまな問題がある中で、やはり経済的な問題がいちばん大きいことがわかりました。そういった中でも、やりがいを感じ非常に充実している、研究が好き、ロールモデルになりたい、など、ポジティブな意見もありました。

6 大学女性協会に求めること

<本調査について>

- ・インタビューで話を聞いてもらえること、また教えてもらえることがうれしい
- ・現状把握、知ることが大切なので、この調査はいいと思う
- ・すでに JAUI とは様々な活動に関係していることを初めて知った

- ・インタビューの機会を得て、自分のことを聞いてもらえることが嬉しい。話を聞くことが楽しかった。いろいろな世代の人と話せることが貴重だった

<要望>

- ・学生的心声をまとめて発信し、行政等に届けてほしい
- ・ユース同士のつなぎ役をお願いしたい
- ・意見や情報交換がカジュアルな雰囲気のできる場の提供
- ・SNS での発信によるつながり
- ・女性に対するハラスメントや孤独で寂しい時の相談相手と機会の提供
- ・いろいろな分野の女性博士の講演を聴く機会の提供
- ・経済的に厳しい学生の支援
- ・若者に、放っているわけでない、見守っている、拠り所がある、というメッセージを伝えることが大切だと思う
- ・違う世代とどうコミュニケーションをとればよいかかわからない
- ・日本人の考え方や文化がわからないために生じる悩みは、外国人の友人同士でシェアはできても、解決できない。日本人は相手が間違っても指摘しない傾向にあるので、信頼のおける年上の女性達と親しくなって、直してもらい、良いところなどを教えてもらいたい
- ・一般論として、団体内にだけ留まり従来の活動を続けるだけでなく、実際に外部の若者たちと一緒に何かを行うなど一歩を踏み出してもらおうと、若手にとってありがたいのではないかと(このアンケートとインタビューは好事例の一つ)

7 その他

<高校生活>

- ・コロナで、思い描いた高校生活ができなかったのは非常に惜しかった

<大学生活>

- ・保健師をめざし、看護学部に入學した。保健師の仕事の予防医療の部分が好きで、高齢者の健康増進という部分に興味がある。アルバイトをして中国語を学ぶために留学という目標のある大学生活を送っている

<人間関係>

- ・人との繋がりを緩く保ち続ける社会のあり方を考えていきたいと思っている

<将来について>

- ・日本で日本企業に就職して、母国に関する仕事につくこと。製造業や食品関係の業界を希望。将来母国に帰ることがあれば、そこで日本に関わる仕事をしたい
- ・研究が大好きで、将来の仕事について考えた時、自分の好きなことで社会に貢献できることがベストであり、それが研究だと思った
- ・社会を変えたい、何かおかしいよということに根拠を提示し続けるのが研究者だと思う。社会問題を言い続けたくて研究者にはまった。学問的関心もある。立場の弱い人たちのために研究を続け、上から目線ではあるが絶対にその辺にいる研究者にははらないぞと決めている

<学外での経験>

- ・県議会議員のインターン経験あり。政治的な考え方の違いもあり、意見を交わすことができなかった。若者とのコミュニケーションに慣れていて、意見は受け流された。大学においても話を聞く、というパフォーマンスにし

か感じないことがあった

- ・「若者会議」で市長が若者の話を聞く催しを体験したが、面白いイベントで終わり、意見は反映されない。表層的で「関り不足」と表現されるような関係しか築けず、世代間の分断があると感じた
- ・市の「子どもを守る条例」、子どもの権利条約に則った条例への変更を働きかけたい
- ・公務員希望者への説明会の際に、ことさら男女格差がないことを強調されたことに違和感を持った

8 インタビュアーの感想

- ・4月以来孤独を感じたことが、本インタビューを受けた動機と感じた
- ・大学教育の有償・無償の議論だけでなく、奨学金の返済について見直しが必要と思う
- ・本部のCSW派遣や大学院生との交流や支援など、支部は若者が温かいメッセージを自然に感じてもらえるような交流を増やすなど、JAUWがすぐに行えることを実行していくことが良い
- ・既に自分を確立して自立している、高い自己肯定感を築けている、コロナ禍での状況を前向きに受け入れていた方が多く、将来のビジョンが明らかな方もいた
- ・社会の為に活動したい思いはあるが、具体的に何ができるのか迷っているようなので、若者たちの「何かやりたい」という気持ちに応える活動ができればと思った
- ・教員を目指している人は、サークル活動から現代の中高生の状況にも問題意識をもって観察していた。本人は積極的に人と関わることに価値を見出しているが、そうでない人も

いることを認めており、そういう人とも区別せずつながりをもてるようにと考えていることがわかった

- ・2022年大学入学者は最初から対面授業で、ポストコロナ禍とはいえ生活自体はコロナ禍の影響は受けていない。しかし、高校時代をコロナ禍での非日常を送ったことは記憶にも経験としても残っている世代である
- ・JAUWとしてユースの意見を聞く場を設けること、シンポジウム、セミナー、あるいはワークショップなどを開催するとよい。ご本人からも「今回お話をさせていただいて、すごくエネルギーをいただきました。またお話をさせていただきたいです。」との連絡を受けた。ワークショップなどはユースと相談しながら企画していく
- ・留学生は日本の就職活動の難しさ、特に面接試験に戸惑っているのも、日本人学生とは違った終了支援が必要である。コロナ禍によるオンライン授業以外にも、大学院大学のため学内での日本人との交流の機会がとてもなく孤独を感じている。日本の社会文化や特性といった留学生活で得られるべき学びの機会が失われている。留学生の生きづらさへの寄り添いは、JAUWの目的の一つ「国際協力と国際平和」への糸口となる。自らの進路を切り拓く力強さをもった方なので、ベトナムと新潟の架け橋として将来の活躍を期待
- ・困難な状況の中でも、自分の今と未来のために、より良い方向を模索する賢さと逞しさを感じられた。社会活動には何か少しでも接点があれば、各自のペースでつながっていけるような感触であったので、そのような機会を作ることがJAUWの役目である

- ・学問への愛情と自立心、目標に向けての明快な理解と行動力をもった方で、将来に不安を抱いている若手研究者のロールモデルになれる人。JAUWでも、今回のユースへのアンケート/インタビューを機に、若い方たちとの交流をさらに増やしていくとよい
- ・学業と経済活動を両立させる難しさに直面しながら頑張っている学生を応援したいと強く思う。若手研究者を取り巻く環境の厳しさを繰り返し聞くにつけ、改めて弱い立場の人たちのためにJAUWからの奨学金の拡充とあり方の検討が必要
- ・若者ならではの社会の矛盾や理不尽さに対する気づきと、課題解決に向けた旺盛な発想力と実行力に脱帽。問題意識とそれへの取り組みを、言葉だけでなく、SNSの活用、世代や性別を超えた多様な人々を取り込む力がある方で、構成・編集の力を駆使して適切に表現し広く社会に伝え、効果を発揮しつつあるので、将来は報道などに関わる事を期待

<インタビューを行う際の課題>

- ・インタビュー会場の選定が難しい
- ・アンケートの問いの作り方が難しい。「ジェンダー」「女性」「男女共同参画」などの言葉か、言葉からの連想からか、何かマイナスのイメージをもたれてしまうと回答を引き出すことが難しい

9 ユースとの報告会について

2024年2月27日に本調査研究のアンケートとインタビューを振り返って意見交換をユースとオンラインで行ないました。参加者は

ユース 3 名と JAUW 会員 12 名でした。その中で、次のような意見や感想がありました。

ユースからの意見

- ・国際化の必要性。実体験から英語力、議論の力不足を感じた
- ・家庭でも議論が大切だが、日本の子どもが意見を持つことに制限があるように感じる
- ・JAUW に行政への働きかけを行なって欲しい
- ・若者ってこうだから、という決めつけがある
- ・萎縮したり、気にしすぎたりすることがある

JAUW 会員からの意見

- ・ユース同士をつなぎたい
- ・JAUW にインターン制度を作りたい
- ・対等な立場でないと感じる。へりくだる、フランクになりきれしていない、と感じる
- ・反応を気にし過ぎではないか。鈍感になることも必要
- ・シニア側もユースを圧倒しない。年齢を忘れて関わる。共感力をつける
- ・共に活動中にはギャップを感じない

【インタビューと報告会のまとめ】

対面あるいはオンラインにて直接インタビューを行えたことがとても有意義でした。学業も生活もコロナ禍の影響を受けた世代ですが、影響を受けた時期や学校側の対応、専攻内容、地域などの違いはありました。しかし、インタビューに応じてくれた学生は皆、自己を確立している方だと思いました。コロナ禍で、紆余曲折を経ながらも最終的には置かれた状況をポジティブに受け止めて、各自さまざまなアプローチを模索しながら、学業、友人関係、社会生活を継続させつつ、将来のビジョンに向かって進んでいる方々という印象でした。

ユースの声を聴く、という本質を再認識させられる機会であったことは大きな意味がありました。

幅広い世代ともっと交流したい、交流の機会を設けて欲しい、という強い要望が複数の学生から寄せられていたことを受けて、まずは、オンライン報告会を行えたことは第一歩でした。

オンライン報告会の最後には、ユースから「ドアが開いたような気がする、是非対話の継続を」という声が上がりました。

第3章 まとめと考察

1 本調査の特徴

2020年～2022年、私たちすべてが経験したコロナ禍を振り返ることが、誰もが生きやすい社会の実現に不可欠だという問題意識のもと、本調査を行ないました。特に、ユース（＝若い次世代）それも当事者の視点を積極的に学ぶことをこころがけました。

調査はインターネットによるアンケート調査、個別インタビュー調査、そしてユースとの報告会という3段階を経て行いました。

アンケート調査は2023年5月～7月中旬の期間に実施し合計291名の回答者を得ることができましたが、調査協力依頼方法が支部を通じてであったため、回答者が協力支部の地域に集中したことが特徴です。県単位の回答者のばらつきは長崎県の58名から群馬県、千葉県、長野県の各1名までありました。

アンケート協力者の性別では女性が8割で、学校種別では大学（4年制）が8割でした。年齢によりコロナ禍の影響をうけたタイミングが大学進学前と後になる集団にわかれしました。この時期的違いについての考察では、回答結果に違いをもたらすほどの大きな差はありませんでした。

設問では、コロナ禍の影響を調べる以外に自己肯定感や家族や周囲との関係性や環境などに関するものを冒頭に質問しました。これは、既存の若者を対象にした調査（子ども家庭庁「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」）を参考にしました。また、学校以外での社会活動についても質問しています。回答対象者が学校教育でSDGsを学

んできた世代であることを踏まえ、参加している社会活動の種類をSDGsの指標に照らして回答してもらいました。

個別インタビューは、インターネットアンケート調査で、インタビューへの協力意思の有無を尋ねて、協力を同意してくれた人に個別に連絡を取り、日時場所などの調整を経て行いました。インタビュー調査についても、支部の協力をいただきました。アンケートでは知ることのできなかつたコロナ禍の学生生活について様々な事実が明らかになり、発言からユース当事者の生の視点を知ることができました。

ユースとの報告会は、インタビュー調査を経て、調査を実施した私たち（大学女性協会会員）に示したユースの問題意識、すなわちこの調査を調査報告だけに終わらせることなく社会的解決方法を共に考えてほしいという共通した思いを受けとめるという意味で行いました。

2 コロナ禍がユースに与えた影響とは

この調査を通じてコロナ禍はあらゆる地域に暮らすユースに共通した影響を与えていたことが明らかになりました。例えば、対面授業ができなくなりオンライン講義が導入・繁用された事実、サークル活動のように大学生生活でそれまで当たり前に行われていた活動が制限された事実、アルバイトができなくなり、経済的な困難に陥ったユースがいたことの実、などが全国各地で共通した事象でした。

コロナ禍の影響を尋ねた結果、ネガティブなことばかりではなく、ポジティブな選択肢にも多くのユースが共感の回答を寄せていたこと

も興味深い発見でした。最も多くの人を選択した「人とのつながりの大切さに気づいた」という回答は、ポストコロナ禍の社会に生きるすべての人々にとって示唆を与えています。

ネガティブな側面としては、人間関係のものと経済的な問題が主なものとしてあげられていました。経済的な問題として深刻だと思われたのは、学費や生活費をアルバイト収入に依存している一部の学生たちの困窮の事実でした。この調査の回答者は、家族との同居が多く、独り暮らしの人は少なかったため、件数としては少数でしたが、経済的困窮の解決策のひとつとして、奨学金の充実を求める意見が多数あったことも事実です。

自己肯定感の度合とコロナ禍で課題を抱えているか否か、家族同居と独り暮らしという生活環境の違いが、コロナ禍で経験した困難の存在に影響しているか、社会活動に参加しているか否かで自己肯定感に違いがあるかなど、相関関係について、私たちの仮説をもとに分析を試みましたが、回答者の数の少なさなど調査データの制約と我々の分析技術の不足から、明確な結論を導き出すことはできませんでした。

しかし、設問2でコロナ禍で受けた影響について、ポジティブな選択肢とネガティブな選択肢を、どのような人が多く選んでいるかを見ると、設問1で「自分のことを好ましく感じている」という問いかけに、自己肯定感が高い人のほうがポジティブな影響を若干多く選んでいる傾向がみられました。しかし、設問1で「信頼できる人がいる」「安心できる居場所がある」と回答した人のコロナ禍で受けた影響をみると、ポジティブとネガティブの両方の選択肢が選ばれており、ユースはひとりひとりがおかれ

た環境にかかわらずコロナ禍においてさまざまな影響を受けていたことがわかりました。

3 コロナ禍で見えてきた社会課題とは

アンケート調査のなかで、設問3「(コロナ禍で)受けた影響により、悩んでいることや困りごとをどのように解決、改善しましたか」という問いに対して、親などの家族や友人に相談した人が多かったことは容易に想像できる結果ですが、誰にも相談せず、自分で何とかしたという人が3番目に多かった事実は何を意味しているのでしょうか。その悩みや困りごとが、個人で解決できるようなものであった可能性はあるとしても、相談する相手がいなかったかもしれないと思うと、ユースのなかには孤立状態にある人もいたことを想像させます。

学校に設置されている相談窓口やカウンセラーの利用が、コロナ禍という人との接触を禁じられた特殊な状況の中で機能したのかどうかについて、ポストコロナ禍の今、点検する必要があるように思います。なによりも、困っている人の相談を受けるといって受け身ではなく、困っている人を見つけて積極的に支援するというアウトリーチの相談体制も必要ではないかと考えさせられます。

個別インタビューの中では、学業から経済問題まで包括的に相談ができる「スクールカウンセラー」の設置を大学に訴えている活動についても言及がありました。

また、政府や行政に対する不信感について言及する若者もみられました。コロナ禍でいち早く実施された「ガーゼ製マスクの全国民配布」の政策を引きあいに出して、自分たちの発言や要望が政策に反映されていない現実に対して

憤りを表現する人もいました。また、若者の意見を聞くということが、政治的ポーズにすぎず、実際の政治の場で無視されている現実を訴える人もいました。

今回のアンケート回答者は、自宅通学者や地方都市在住者が多かったことも影響していると考えられますが、経済的困難について自分のこととして窮状を訴える声は少なかったといえます。しかし、回答者が見聞きした話として、理系の大学院生のアルバイトと学業の両立の難しさや、社会人として再入学した人の経済的な基盤の弱さなどについての話しも聞けました。

大学生にとって、アルバイトは「自由に使えるお金」の獲得方法であるだけでなく、留学費用を用意する為であったり、家族からの支援が受けられない学生の生活費に充てられていたりする事実は、このコロナ禍を経てさらに顕在化した経済的問題のひとつであったように思います。

特に奨学金については、給付型奨学金の充実について、日本では近年やっと議論が始まったばかりですが、「親ガチャ」に代表される、各家族の経済格差による教育を受ける機会の不均等をこれ以上広げないためにも、奨学金の拡充は重要な社会課題だといえるでしょう。

4 ユースとの関りの重要性

インタビュー調査の中で、様々な社会的活動や学術活動を積極的に行っているユースの存在に感銘を受けました。

「意識高い系」としてみられないように注意しているという発言があったのをみると、社会的問題に関心があっても、それを表現する時と場が必ずしもあるとは限らないと感じている人もいることがわかります。

個別インタビューに応じてくれた人の中には、「なぜ、インタビューを受けてみようと思ったのか」との質問に、「自分たちの意見をしっかりと聞いてくれる人や場を求めている」という人も多くいたことがわかります。さらに、この調査を実施した私たちに、「ユースの考えや意見を政策の場に届けてほしい」と希望する人もいました。

オンラインで開催した報告会の感想のなかで、「年上(参加した大学女性協会会員)の人たちとの接し方に戸惑いを感じる」という発言がありました。私たちは、ユースの生の声を直接聴きたいと願っていましたが、ユースとの関りの持ち方についても配慮が必要だったことを気付かせてくれる経験でした。

5 JAUW としての対応

私たちは、調査結果に基づき、そこから得られた課題を次ページに示す「提言」としてまとめました。

提 言

一般社団法人 大学女性協会
会長 長谷川瑞穂

(一社) 大学女性協会では 2018 年度から 2023 年度まで、「教育・ジェンダー・共生」をテーマにシンポジウムやセミナーを開催してきました。2022 年の公開シンポジウムは「ユースの視点から見直そう これからの日本」をタイトルに掲げて開催しましたところ、「生きづらさ」という言葉がキーワードとして浮上しました。それらの課題を追及すべく、3 年を超えて長期にわたったコロナ禍が、特にユースの方々の生活にどのような影響を及ぼしたか、また私たち NGO にできることは何かを模索することを趣旨に、2023 年度に「ケアしあう希望ある社会を目指して～ユースの生きづらさを探る～」アンケートおよびインタビュー調査を実施しました。

当協会の調査結果に基づき、社会の変動に即対応した政策の見直しをさらに進めていただきたく、下記の通りの提言をいたします。

1. 教育機関内における相談システムの在り方を見直し、ユースが気軽に相談できる体制を作る
2. 授業料無償化の政策や奨学金制度における給付制への移行を加速し、経済的背景に関係なく、誰もが教育を受けることができる仕組みづくりを進める
3. 自立した個人を形成する市民教育、特に考えや意見を政策の場につなげる姿勢を培う主権者教育の徹底を図る
4. ユースが社会へ繋がっていくことのできるきっかけ作りとして、世代を超えた対話の機会や場の設定を多くし、「ケアしあう社会づくり」を進める

【資料1】 アンケート・インタビューの設問

(一社) 大学女性協会 調査・研究委員会は、SDGsの「誰一人取り残さない」という目標を念頭に、誰もが生きやすい希望ある社会の実現を願って活動しています。コロナ禍で生活が大きく変化し、さまざまな問題が顕在化してきたことから、その背景を知り、解決方法を探り、どのように助け合うことができるかを共に考えたいと思います。調査へのご協力をお願い致します。

アンケートの設問

1. ご自身のことを教えてください。
<input type="checkbox"/> 自分のことを好ましく感じている
<input type="checkbox"/> 熱中できるものがある
<input type="checkbox"/> 夢や目標がある
<input type="checkbox"/> 信頼できる人がいる
<input type="checkbox"/> 安心できる居場所がある

2. コロナ禍でどんな影響を受けましたか。
<input type="checkbox"/> 教育を受ける機会の制約を受けた
<input type="checkbox"/> 人生を深く考えるなど様々な学びがあった
<input type="checkbox"/> 想像していた学校生活が送れなかった
<input type="checkbox"/> 教育を受ける方法についての選択肢が増えた
<input type="checkbox"/> 経済的に厳しくなった
<input type="checkbox"/> 様々な制限を受けストレスがたまった
<input type="checkbox"/> 孤独を感じた
<input type="checkbox"/> 漠然とした不安を感じた
<input type="checkbox"/> コロナ対策に関する政府・自治体への不信感を持った
<input type="checkbox"/> 健康状態がよくなった
<input type="checkbox"/> 健康状態が悪くなった
<input type="checkbox"/> オンラインで人とつながる機会があった
<input type="checkbox"/> 将来への不安(進学・就職)を感じた
<input type="checkbox"/> 人とのつながりの大切さに気づいた
<input type="checkbox"/> 好きなこと、やりたいことを自由にできた
<input type="checkbox"/> オンライン授業は学習しやすかった
<input type="checkbox"/> 対面授業がもっと多い方がよいと思った

<input type="checkbox"/> インターネット環境が悪く学習しづらかった
<input type="checkbox"/> 大学から様々なサポートが受けられた
<input type="checkbox"/> 公的な制度で様々なサポートを受けた
<input type="checkbox"/> その他:

3. 受けた影響により、悩んでいることや困りごとをどのように解決、改善しましたか。
<input type="checkbox"/> 家族や親族に相談
<input type="checkbox"/> 大学の教職員に相談
<input type="checkbox"/> 友人や先輩後輩など身近な人に相談
<input type="checkbox"/> 面識のないネット上の知らない個人に相談
<input type="checkbox"/> カウンセラーなど専門家に相談
<input type="checkbox"/> 行政や公的機関に相談
<input type="checkbox"/> 誰にも相談せず、自分でなんとかした
<input type="checkbox"/> その他:

4. 設問2で選んださまざまな悩みや困りごとを改善、解決しようとするにあたり、障壁(妨げ)となったものは何ですか。
--

5. 設問4の問題解決のために行なった行動を具体的に教えてください。

6. 学内や学外で、ボランティアやイベントなど、社会活動に参加していますか。
<input type="checkbox"/> 参加している

<input type="checkbox"/> 参加していない
<input type="checkbox"/> その他:
7. 参加している活動は、SDG s の 17 の目標のどの項目に関係していますか。複数可
<input type="checkbox"/> ① 貧困をなくそう
<input type="checkbox"/> ② 飢餓をゼロに
<input type="checkbox"/> ③ すべての人に健康と福祉を
<input type="checkbox"/> ④ 質の高い教育をみんなに
<input type="checkbox"/> ⑤ ジェンダー平等を実現しよう
<input type="checkbox"/> ⑥ 安全な水とトイレを世界中に (水・衛生問題)
<input type="checkbox"/> ⑦ エネルギーをみんなに、そしてクリーンに
<input type="checkbox"/> ⑧ 働きがいも経済成長も
<input type="checkbox"/> ⑨ 産業と技術革新の基盤を作ろう
<input type="checkbox"/> ⑩ 人や国の不平等をなくそう
<input type="checkbox"/> ⑪ 住み続けられるまちづくりを
<input type="checkbox"/> ⑫ つくる責任、つかう責任 (生産と消費の責任)
<input type="checkbox"/> ⑬ 気候変動に具体的な対策を
<input type="checkbox"/> ⑭ 海の豊かさを守ろう
<input type="checkbox"/> ⑮ 陸の豊かさを守ろう
<input type="checkbox"/> ⑯ 平和と公正をすべての人に
<input type="checkbox"/> ⑰ いろいろな人や団体との連携
<input type="checkbox"/> その他

8. 具体的な活動内容を教えてください。

9. あなたのプロフィールを教えてください。
a) 年齢 2023年4月2日現在
<input type="checkbox"/> 18歳未満 <input type="checkbox"/> 18 <input type="checkbox"/> 19 <input type="checkbox"/> 20 <input type="checkbox"/> 21
<input type="checkbox"/> 22 <input type="checkbox"/> 23 <input type="checkbox"/> 24 <input type="checkbox"/> 25歳以上
b) 性別
<input type="checkbox"/> 女性 <input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> その他
c) 学校種別

<input type="checkbox"/> 大学 <input type="checkbox"/> 大学院 <input type="checkbox"/> 短期大学
<input type="checkbox"/> 専門学校 <input type="checkbox"/> その他
d) 学年
<input type="checkbox"/> 1年生 <input type="checkbox"/> 2年生 <input type="checkbox"/> 3年生 <input type="checkbox"/> 4年生
<input type="checkbox"/> 5年生 <input type="checkbox"/> 6年生 <input type="checkbox"/> その他
e) 現在 住んでいる都道府県
f) 住まい
<input type="checkbox"/> 一人暮らし <input type="checkbox"/> 寮やシェアハウス
<input type="checkbox"/> 家族や親族と同居 <input type="checkbox"/> その他

10. インタビューのお願い
対面またはオンラインで、さらに詳しく皆さまの声を聴かせて下さい。
<input type="checkbox"/> 都合が合えば、インタビューに応じる
<input type="checkbox"/> インタビューに応じない
<input type="checkbox"/> その他:

インタビューの設問

1. なぜインタビューに答えようと思ったのでしょうか?
2. 大学生活は今どんな状況ですか? 授業・部活動・サークル活動 バイト・学外の活動など
3. 社会活動をしている方へ どんな活動をしていますか?また、関わるきっかけは?
4. 今、大学生活であなたがいちばん問題と感じていることはどんなことですか?
5. 行政・企業・大学等に求めることは?
6. 大学女性協会に望むこと
7. その他

～ 謝 辞 ～

本報告に際しては、下記の地域の皆さまのご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

<アンケート・インタビュー協力学生 居住 18 都府県 >

宮城県 群馬県 埼玉県 千葉県 東京都 神奈川県 新潟県 山梨県 長野県
静岡県 滋賀県 京都府 大阪府 奈良県 兵庫県 岡山県 香川県 長崎県

<協力支部 10 支部>

仙台支部 茨城支部 新潟支部 東京支部 静岡支部 奈良支部 京都支部 神戸支部
岡山支部 長崎支部

————— 編集担当 —————

調査・研究委員会

赤松 千鶴 石塚 浩美 植田奈穂美 笠間 昭子 片岡 雅子 片岡 みか 勝又 幸子 木口 京子
窪田 憲子 塩田 澄子 志垣 瞳 嶋田 君枝 城倉 純子 鈴木千鶴子 鈴木 紀子 鷺見八重子
高坪富美子 谷川 紀子 中道 貞子 縄田真紀子 端本 和子 橋本 慶子 林 恭子 日向美砂子
福田 文子 房野 桂 牧島悠美子 松田 栄子 山下いづみ 渡部由紀子

(2022 年度～2024 年度 登録委員 50 音順)

JAUW 調査・研究委員会報告

ケアしあう希望ある社会を目指して
～ユースの生きづらさを探る～

発 行	2025 年 3 月
発 行 者	一般社団法人 大学女性協会
	〒160-0017
	東京都新宿区左門町 11-6 パトリシア信濃町テラス 101
	TEL : 03-3358-2882 URL : https://www.jauw.org

